

グループ発表

介護ブギウギ—介護民俗学への招待—

発表者 六車由実 (代表・静岡県・特別養護老人ホーム介護士/生活相談員)

小山修三 (大阪府・吹田市立博物館館長)

西川 勝 (大阪府・大阪大学コミュニケーションデザインセンター
—特任准教授)

◆ ♪ 介護ブギウギ ♪

介護ブギウギ リズムウキウキ

心ズキズキ ワクワク

世代を超え響くは 介護ブギウギ

おじいちゃんたち おばあちゃんたち

老人ホームに集まる

話を聞こう そこは記憶の宝庫

燃ゆる心のなか 苦楽の過去 生きた時代

君はきっと 驚き 離れられない

介護ブギウギ リズムウキウキ

心ズキズキ ワクワク

みんなで聞こう みんなで書こう 介護ブギウギ ヘイー♪

(六車編)

言うまでもないが、笠置シズ子の「東京ブギウギ」の替え歌である。この替え歌「介護ブギウギ」に私たちの今回の発表の趣旨が集約されている。

なぜ「東京ブギウギ」なのか。「東京ブギウギ」は昭和 22 年にヒットした歌謡曲であり、「青い山脈」「リンゴの唄」と並んで、どこの老人ホーム

でもよく歌われる曲のひとつである。「東京ブギウギ」は、明治・大正・そして昭和一桁生まれの利用者さんたちにとっては、戦後復興のなか苦勞しながらも輝いて生きていた自分たちの人生をリアルに思い出させる曲なのである。では、「東京ブギウギ」のメロディに合わせて、改めて上記「介護ブギウギ」の歌詞を口ずさんでみてほしい。なんとなく介護の現場の面白さが伝われば嬉しいのだが。あるいはアップテンポのリズムと老人介護といった「重苦しい」テーマとの間に違和感を覚える方もいるかもしれない。

◆ “生き地獄”

確かに老人介護は、現在の日本社会において少子化とともに重くのしかかる大きな問題である。老人ホームに入所あるいは通所している利用者たちの多くは、多かれ少なかれ身体的・精神的疾患を抱え、その苦しみのなかで生きている。体が以前のように思うように動かなかったり、記憶力が減退してしまったりすることで、生きていく自信を失い、「この世は生き地獄だ」と嘆く方も少なくない。社会や家族からの強い疎外感を感じている利用者も多い。医療の急速な発達によって平均寿命が大幅に延びた現在において、豊かな QOL(人生の質)をどのように保ちながら老いていくのか、それをどう介助していくのかというのは深刻であり且つ切実な問題だ。

そうした問題を介護の現場で実践的に考えていこうというのが、今回提示する「介護民俗学」の試みである。

◆ 豊かな人生への驚き

発表者のひとりである六車は、現在、静岡県東部地区の特別養護老人ホームにて介護職員として勤務している。仕事に就いてから今日まで、民俗学での経験を生かして、多くの利用者に関き書きを進めてきた。すると、

それまで「生き地獄だ」と嘆いていた利用者たちが、子供の頃のことや子育てや仕事で活躍していた頃のことを話し始めると、表情は一変して生き生きと目を輝かせていく。それぞれの体のなかで眠っていた記憶は堰を切ったように溢れ出てきて、言葉に、身体に表現されていく。そしてそれを一緒に紡いでいくと、利用者本人がすっかり衰えてしまった頭や体のなかにまだこんなに鮮明な記憶が残されていたのかと驚いたり、自分の人生は結構波乱万丈で面白かったんだなあ、と得意げな表情をしたりするのだ。

そして、話を聞かせてもらっている六車の方も、利用者たちの豊富な経験と知識に驚き、常に新しい発見に心躍らせている。論文や報告書を執筆することを目的とした民俗学の調査では、テーマに沿った聞き書きをするのが当然だと思ってきたが（たとえ遠回りをしたとしても）、介護の現場ではむしろこちらは予めテーマを持たないことによって、私たちの想像を超えた興味深い話を利用者さんからひきだすことができる。介護現場でのテーマなき聞き書きは、民俗研究者としても、介護者としても、そして何よりもひとりの人間としても、さまざまな経験を踏んで生きてきた利用者の人生そのものに触れることのできる至福の時間なのである。

初めに戻れば「介護ブギウギ」は、話す者（利用者）と聞く者（介護者）との間に共有される聞き書きにおける弾む心を歌ったものなのだ。

◆介護の世界へいらっしゃい

一般的に、老人ホームは身体能力も記憶力も衰えた、“社会から見捨てられた”老人たちが集まっているというイメージがあるのではないか。民俗研究者の意識もそう変わりはないだろう。だから、老人ホームの利用者など聞き書きの対象にはならないと、「介護民俗学」の可能性など真っ向から否定されるかもしれない。だが、これまでの六車自身の経験から言えば、

たとえ認知症が進んでいる利用者であっても過去の記憶についてはかなり鮮明に覚えている。また、老人ホームにこそ様々な地域で多様な人生を歩んできた人たちが集まっていると言えるし、彼らの生き方はこれまで民俗学で“想定”されてきたテーマを遥かに超えている。民俗研究者にとっては、老人ホームは、まさに「民俗学の宝庫」なのである。

そして、何よりも、老人ホームに集まる利用者たちは、自らの人生や経験について話をするのを、そしてそれに心から興味をもって聞いてくれる存在を望んでいるのである。

本発表では、具体的な事例をもとに、「介護民俗学」の可能性を提示するとともに、大学等で民俗学を専攻している若者が介護の世界へと足を一歩踏み入れるきっかけづくりができればいいと思う。

◆各発表者の発表概要

六車由実「民俗研究者が介護士になったら」

特別養護老人ホームで介護職員として働きながら、利用者に聞き書きをしてきて見えてきた様々な可能性と課題について、具体的な事例をもとに論じる。

小山修三「五感の挑戦から」

吹田市立博物館での「触る展示 五感の挑戦から」の試みを紹介しながら、六車の発表へのコメントを行う。

西川勝「虚構としての認知症ケア」

精神科病棟やデイサービスにて看護師として働いてきながら、臨床哲学を専門としてきた立場から、認知症ケアの実際について論じる。

注:本発表要旨は高齢者にも読みやすいようにあえて12ポイントにした。